

どうにか川を渡りきった『のら』と『マナ』は、『カッピー』と別れ花畑へと向かった。後ろを振り返ると『カッピー』は気持ちよさそうに川に浮かんでいる。『カッピー』のお腹の上には、何時の間にか小鳥が止まって、気持ちよさそうに綺麗な歌声を奏でていた。花畑までは道が無く、草むらを掻き分けて進む二人であった。『のら』は自分より背の高い草に悪戦苦闘している。『マナ』はというと、用心深そうに周りを見回しながら進んでいる。『のら』は自分の顔に何か付いたのを感じた。それはトンヤリしたブニョブニョした感覚であった。そつとその物体を手で払った『のら』は、大声で「ぎゃー」と叫んだ。「い、い、芋虫、ぎゃー」。「とつちやら」『のら』は芋虫が嫌いな様である。『のら』は慌てふためいて、がむしゃらに草を掻き分けた。その瞬間目の前が開け、美しい花畑が『のら』の前に広がった。

『のら』は花畑に入ってしまった。そこはこの世とは思えないような色々な花々が咲きみだれ、どこまでも続いていた。『マナ』は帰りのことが不安になりだし、『のら』に「そろそろ帰るぞ」と言った。『のら』は少し不満そうに辺りを見回して、「じゃー、あの丘の上まで行ったら帰る」と言った。そこは少し小高くなった丘で、その方向にはうっすらと道のような跡がついていた。『マナ』はしょうがないなと思いつつ丘の上を目指した。

丘に登りながら後ろを振り返ると、眼下には花畑と『カッピー』と別れた川が見えた。その遙か彼方には広大な世界が広がっている。『のら』は始めて見るのか、不思議そうにジッと遠くを眺めていた。『マナ』の目は少し虚ろなように川の先を見ていた。

